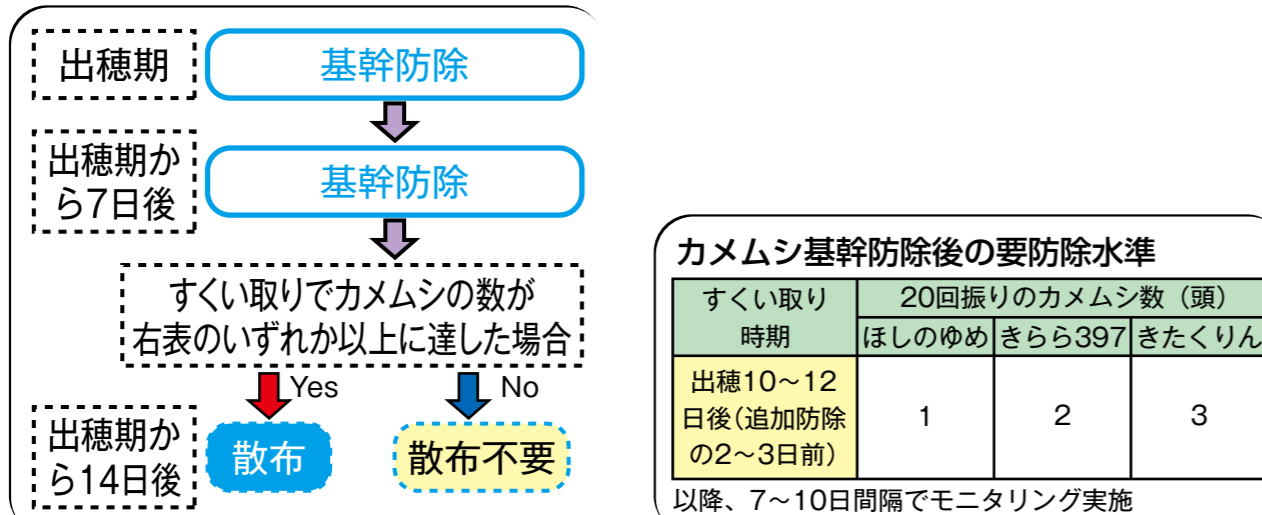


平成27年度 病害虫防除のチェックポイント

- ・BLASTAMによる「いもち病」の感染好適条件となった地点が増えています。圃場の見回りを強化し、早期発見に努め、基幹防除を実施しましょう!
- ・カメムシは基幹防除を徹底するとともに、モニタリングを利用して追加防除の要否を判断しましょう。

モニタリングを利用したカメムシ防除



カメムシ・いもち病防除のスケジュール

	7月	8月	9月
カメムシ防除		基幹防除 出穂期 出穂後7日目	要否判定による追加防除 出穂後14日目 21日目 28日目
		○	○
いもち病防除	葉いもち	穂いもち	
	茎葉散布 ○	○	○

○: 必ず実施
○: 発生に応じて実施

- ◆いもち病は、基幹防除後も引き続き発生予察を実施し、必要に応じて追加防除を実施する。
- ◆MBI-D剤の防除効果が十分に得られていない水田では、本剤を使用しない。使用は防除ガイドに準拠する。
- ◆メトキシアクリレート(Qol)系剤使用の注意事項
 - ①使用は年1回とする。
 - ②体系防除では作用性の異なる薬剤と組合せる。
 - ③採種圃では使用しない。
 - ④規定量の処理を行う。

効率的なカメムシ防除技術

◆基幹防除時期における効率的防除技術(H27指導参考事項)

「出穂7~10日後の1回散布」

効果が高く残効性の長いジノテフラン液剤、エチプロール水和剤Fを散布することで出穂期防除を省略できる。

◆水面施用剤による防除(H20指導参考事項)

「出穂期~7日後における1回施用」

出穂2週間後まで残効が認められ、出穂期および7日後の茎葉散布2回と同等の効果が認められる。



アカヒゲホソミドリカスミカメ



カメムシ被害による斑点米

農薬のドリフト防止と適正使用

- ①農薬の飛散(ドリフト)防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応する。
- ②風のない条件での散布およびドリフト低減ノズル等の器具の使用を基本とする。
- ③周辺に他作物や養蜂場がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に配慮する。
- ④農薬の散布は蜜蜂の活動が盛んな時間帯を避け(午前8時~12時頃)、早朝や夕刻に実施する。